

# ポスト2020作業部会 (OEWG)とは

資料作成

国際自然保護連合日本委員会事務局長

道家哲平

2019年7月19日段階での情報を元に

# 自己紹介：道家哲平

- (公財)日本自然保護協会  
広報会員連携部長 (ウェブ、SNS、メディア担当)  
会報「自然保護」編集長

日本自然保護協会という、自然保護に関する全国NGOが直面する最前線の自然保護問題/取組みを分かりやすく、魅力的に伝える部門を統括

- 国際自然保護連合(IUCN)日本委員会  
副会長兼事務局長

IUCN(国際自然保護連合)や生物多様性条約の動向把握を把握し、伝えるほか、生物多様性国連目標(愛知ターゲット)達成のためのネットワーク構築事業「にじゅうまるプロジェクト」を展開。生物多様性条約関連会合への参加経験は、日本で一番。国、企業、自治体、市民など幅広い講演経験

# ポスト2020作業部会 (OEWG) とは

- Open-ended Working Group on the Post-2020 Global Biodiversity Frameworkの略。
- 「ポスト2020生物多様性世界枠組みに関する公開作業部会」が直訳。日本語で省略するなら「ポスト2020作業部会」か。
- 2019年8月(ナイロビ)、2020年2月(昆明)、7月(ボゴタ)の3回を予定。
- 生物多様性条約における作業部会 (Working Group) とは、非常設で、COPの決定に基づいてひらかれる会合をさす。類似のものは、先住民の知識に関する8(J)作業部会など。

# 会合開催の経緯

- 愛知ターゲットを検討したとき(2008-2010)には、作られなかった特別な作業部会

なぜ、新しいプロセスを作ったのか？

- ポスト愛知が重要、必要な協議時間を確保することが大事。そのために、設置が合意されたと考えられる。
- OEWGの進め方(ポスト2020の議論の進め方)と、ポスト2020の内容の両方を検討していく。
- OEWGの進め方には、別の会議体(科学技術助言補助機関、条約の実施に関する補助機関、その他の会議体)に、検討をお願いすること、なども含む。

# OEWGの焦点

- ポスト2020の具体的な構造(目次)・言葉/目標などを協議し、COP15に提案する!
- 締約国以外の参加(ユース、NGO、企業)のあり方なども大事。
- 国が全部発言するまで、オブザーバーは発言できない(当然、発言時間も短い)という運用がされるかも。

# OEWG以外のプロセス

- コメント募集 (Submission) — COPやOEWGの要請に基づいて、CBD事務局が、意見照会を実施。関係者は、**書面での意見を提出する**
- 地域コンサルテーション — アジア太平洋、西ヨーロッパなどの**地域ブロックごとの協議**
- テーマ別コンサルテーション: 里山、海洋など、テーマごとに企画される**協議**。CBD事務局が主催したり、国連大学が主催するなど様々
- その他の国際会議: 国際機関/国際NGO等が行う**ワークショップや、シンポジウム**など
- IPBESのグローバルアセスメントレポート(2019年5月発表)や、地球規模生物多様性概況第5版(2020年5月発行予定)などの、**報告書**

# アジア太平洋地域ポスト2020 ワークショップ

- 2019年1月28日から2月1日@名古屋国際会議場
- アジア地域から120名程度参加
- 政府のほか、国際機関、NGO、ユースなども参加
- 初めての地域コンサル会合のため、皆慣れない雰囲気もあったが、NGOがファシリテートに協力するなどもあり、非常に良い議論ができた。



# アジア太平洋地域ポスト2020 ワークショップ

- プログラムの特徴—丁寧なプロセス・バックキャスティングで発想  
: 他己紹介→前提共有→過去の取組共有(第6次国別報告)→国際機関の視点→アジアのビジョン→ステークホルダーの視点→ポスト2020の要素→ラップアップ
- 進行: グループ議論中心。オブザーバーも公平に発言でき、時には、国から意見を求められることも。NGOの意見も反映(COPと異なり政府のサポート不要)。グループワークへの慣れに、国ごとに差があった印象
- 目標そのものより、実施のガバナンス、コミュニケーションと主流化が論点



# ポスト2020の構成

- 3つのシナリオがありうる一枠組みそのものを維持、わずかな修正、完全なストラクチャー変更。
- アンビシャスな目標とプログラム、かつ、リアリスティックな目標のバランスを取ることが重要。
- 横断的なプログラム・ターゲットの設定が必要。
- オペレーション・ファイナンシャルメカニズムが必要。
- ABS や関連する伝統的知識は各国の対応状況が不十分であるためターゲットに入れた方がよい。遺伝子組み換え(BS)は言及は必要であるが、ターゲットに入れなくても良い
- ECO-DRR などの要素として欠けているテーマがある。基本は残しつつ、ミッシングポイントやテーマを入れる必要がある。
- データの不足
  
- As Appropriate のような、やらなくてよい・エクスキューズの言葉はいらない。
- 政治家や実践者向けの言葉はまた異なる。魅力的な言葉が必要。
- ターゲットは、シンプルで短いほうが良い。
- ガイド文書が必要。⇒ガイドラインはOne Off ではなく、アップデートが重要だ。

# ポスト2020 主流化と連携

- 重要性については全員一致。主流化をどうポスト2020に入れるかについては、いろんなオプション選択肢があることが提案された：ターゲットに入れる、ツールやメカニズムに入れる、他のセクターターゲットにいれる、横断型目標や前文などで書き込む、というアイデア
- 主流化目標を、SMART 目標にできるか、指標は何なのか？
- 「すべての企業・産業群に生物多様性の視点を入れる」というワーディングがありうるか？
- EIA やSEA やSpatial Planning、Strong legislation などの手法の重要性
- ポスト2020 のすべての目標で主流化の行動が生まれるように、明確にしたりする必要がある。
- 主流化がCBD ファミリー以外に知られているだろうか、という指摘。

# ポスト2020 主流化と連携

- SDGsへの注目を活用して、国内レベルでも実施が進む方法ができないか。
- ポスト2020 を、SDGsの2020 で失効(?)するものをアップデートするつもりで作る。
- SDGsのゴールだけではなく、2030 アジェンダにも言及することが重要 (Leave No One Behind などの原則もカバーするべき)
- 他条約とレポーティングの共有。条約との目標の連携

# ポスト2020 資源動員 生物多様性コミットメント

## <資源動員>

- 量的目標、明確な指標が必要。SMARTであるべき。GEF やガバメントファンディングなどの伝統的なファンディングだけでなく、他のソースを考える必要がある。
- マーケットベースや、生物多様性オフセットなどの活用。
- 生態系サービスの価値評価が資源動員につながることもある
- **ABT3の活用**。ネガティブインセンティブをポジティブインセンティブに変えること
- ファイナンスだけでなく、人的なリソースや、技術的なリソースもカバーする必要
- 気候変動やSDGsと近い、ECO-DRR などのテーマなどを活用して、開発系資金をこちらに誘導する必要
- 戦略の開発に支援を行う。
- GEF だけでは不十分で、気候変動の事例を学ぶべき

## <生物多様性コミットメント>

- 目標やガイダンスが必要ではないか。どのようなコミットメントが期待されるかという点を明らかにするべき。
- NDC for Nature。補助金や行動変容などもカバーした方が良い。

# ポスト2020 コミュニケーションと 能力養成

- グローバル、リージョナル、ナショナルレベルで考える必要。コミュニケーションパスウェイを意識したり、メッセージをシンプルにする必要がある。
- ローカルコミュニティを含む、ターゲットオーディエンスを設定する必要がある。
- ポスト2020 のコミュニケーションも重要だが、コミュニケーションに関するターゲット1の要素をポスト2020 の目標としていれつつ、より、SMARTにする必要がある。
- ターゲットオーディエンスの設定。
- コミュニケーションにもっと投資が必要。

# ポスト2020 コミュニケーションと 能力養成

- 非常に重要な課題
- 多様なレベルでキャパシティビルディングが必要
- 指標も必要だが、どのようなものが考えられるか不明。
- 能力養成事業の効果も評価する必要
- 能力開発の蓄積評価(ストックテークのアセスメント)が重要ではないか。

# 多様な視点の組み込み

- 世界レベルのマンデートが進めるためのツールになる
- NBSAP や生物多様性の委員会のような組織を作って、統合を進める。
- プロセスの透明性の重要性。
- inter-sectoral or cross-sectoral の協働をハイライト。各国で有用なツールがある。
- 企業に最低限望むことなどを明確化する必要
- 投資家の巻き込みが重要
- プロセスへの参加と当事者意識の醸成が必要、
- フレームワークの文章だから、要素をキャプチャしつつ、どこまで細かく詳細を決めるかというバランスの問題がある。

# NBSAP とレビューのありかた

- NBSAP は重要なツールであり、ポスト2020 でも重要なツールとなるべき。
- NBSAP の有効性(課題や障害など)
  - 政治的な理解や意思が不十分(障害)
  - 国レベルでの資源が足りない(障害)
  - ローカルレベルでの生物多様性戦略が有効ではないか
  - コーディネーションメカニズムが不足していることも課題
  - ターゲットセッティングの仕方が分からないという指摘。
- 有効な手法
  - コーディネーションメカニズムが必要 ナショナルコミッティーなど
  - 国内実施のガイダンスなどがあってもよい
  - レビューメカニズムの改良
  - ラチェットメカニズム(生物多様性コミットメント)
  - コミュニティーベースモニタリングメカニズム
- ソフトローと他の条約のような厳格な仕組みについての意見。



# ポスト2020は、どんな変革をもたらすべきか、 もたらすことができるのか？

- 生物多様性の劣化を止め、カーブを上昇させるために変革が必要

VS

- 一方で、愛知ターゲットの枠組みを残すべきという意見
- 同じ枠組みでは、失敗した愛知ターゲットを、再び繰り返すだけ？
- What make a difference?

# ポスト2020 ここまでのポイント

そもそも、ポスト2020枠組みを想像できる？

愛知ターゲット見たことある？

愛知ターゲットは

<https://www.cbd.int/decision/cop/?id=12268> を見  
みよう

# SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

世界を変えるための17の目標



SDGsも一緒。基本は、文字だらけの文書。  
195カ国の共通の文書  
でも、それで、世界が変わる文書

# 現在、愛知ターゲットは、、、

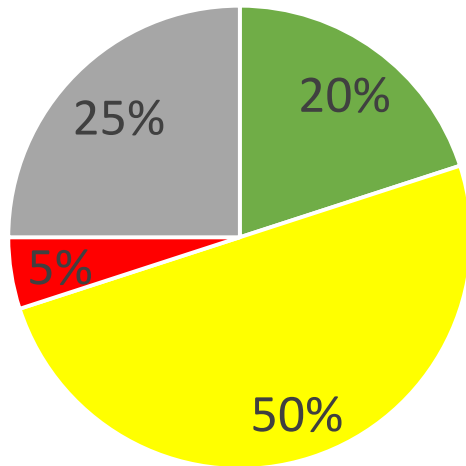
- 国連持続可能な開発目標(SDGs)に入り、
- 140カ国の生物多様性国家戦略が愛知ターゲットを組み込み
- 愛知ターゲット達成のための行動は数多く生まれているが、劣化を止めるに至っていない今なお、世界のほぼ全地域で進行中
- 生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学－政策プラットフォーム(IPBES)レポートでは、達成状況困難という評価。
- 「人と自然の共生(2050)」ビジョンは、今なお重要で、達成可能なシナリオもある
- 劣化を止めるには、変革的変化(transformative change)が必要
- COP14の交渉では、ポスト愛知の検討プロセスが決定

		日本の評価(2018)	IPBES(2019)	GBD4(2014)
戦略目標A	目標1	価値の普及	2	2
		対策の普及	2	2
	目標2	計画への組込	2	2
		会計への組込	2	1
報告への組込		2	1	
目標3	負の誘導措置の除去	0	1	
	正の誘導措置の導入	0	1	
目標4	持続可能な消費	0	1	
	生態学的制限の中での活用	0	1	
戦略目標B	目標5	損失をゼロに	2	1
		劣化や断片化をゼロに	2	1
	目標6	持続可能な収穫	0	1
		回復計画の導入	0	0
	目標7	漁業の改善	2	1
		農業の持続可能性	2	1
		養殖業の持続可能性	2	1
	目標8	林業の持続可能性	2	2
		汚染の防止	1	1
	目標9	栄養塩流入の抑制	1	1
優先度決定		2	3	
侵入経路特定・優先付け		2	0	
定着した種の駆除		2	1	
目標10	侵入経路の管理	2	1	
	サンゴ礁への圧力最小化	2	1	
	その他の脆弱な生態系への対策	2	1	
戦略目標C	目標11	海洋保護区面積	2	3
		陸上保護区面積	2	3
		重要生息地の保護	2	2
		生態学的代表制	2	2
	目標12	効果的な管理	2	2
		泉源への統合	2	2
		絶滅防止	2	1
目標13	危機ステータスの改善	2	1	
	栽培品種の多様性保持	0	2	
	家畜品種の多様性保持	0	2	
	野生原産種の多様性保持	0	2	
	価値ある種の多様性保持	0	0	
戦略目標D	目標14	遺伝的かく乱の最小化	2	2
		生態系サービスの回復	2	1
	先住民等への配慮	2	0	
目標15	生態系レジリエンスの強化	2	0	
	15%の復元	2	0	
目標16	名古屋議定書の発効	3	3	
	名古屋議定書の実施	3	2	
戦略目標E	目標17	国家戦略の策定	3	3
		国家戦略の法的位置づけ	3	2
	国家戦略の実施	3	2	
目標18	伝統的知識の尊重	3	2	
	伝統的知識の統合	3	0	
	先住民共同体とのパートナーシップ	3	0	
	科学技術の改善と共有	3	2	
目標19	科学技術の応用	3	0	
	自然動員	0	2	

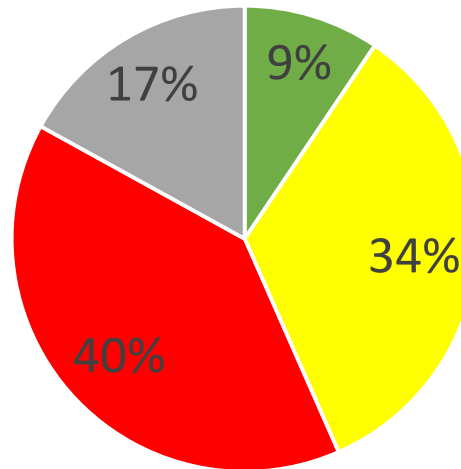
# 正式評価は、2020年5月発表予定

- 2014年の評価(見込み)として、地球規模生物多様性概況第4版(国レビュー)(右)
- 2019年IPBESグローバルアセスメント(科学者レビュー)(中段)
- 日本政府が提出した国内実施状況の報告(第6次国別報告書)(日本政府レビュー)(左)
- 緑＝達成、黄色＝進展あったが達成には不十分、赤＝進展なし、後退、灰色＝目標設定なし/評価不能
- 評価軸や評価者等が異なるため、単純比較できないことに注意

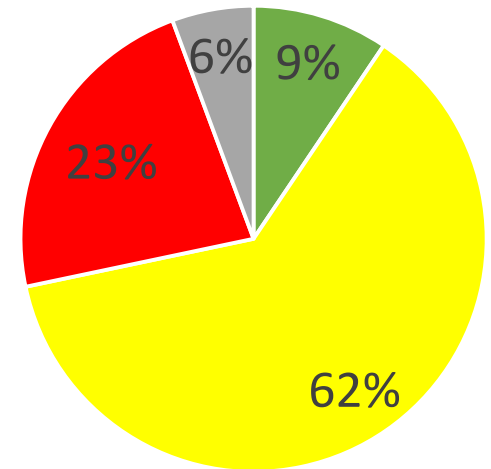
国別報告-日本 (2018)



IPBES(2019)



GBO4(2014)



緑＝達成、黄色＝進展あったが達成には不十分、赤＝進展なし、後退、灰色＝目標設定なし/評価不能

- 評価軸や評価者等が異なるため、単純比較できないことに注意
- 2014年の国中心の評価/見込み(右)より、2019年の科学者中心の評価は、現状を厳しく評価。日本の自己評価は甘い？
- 悪化/進展なしとされたのは、生物多様性損失の根本要因や直接危機要因への対策
- 対策に関するものの多くが、「進展はあったが不十分」

# ポスト2020の検討プロセス (COP14/34の主な中身)

- 参加型を重視
- 特別作業部会で検討(カナダとウガンダから共同議長)
- プロセスの普及啓発のためのハイレベルパネル(設置予定)
- 多様な関係者(\*)を対象にしたり、参画したりする準備プロセスや、テーマや地域別ワークショップの開催等を通じて検討を進めることを呼びかけ
- 2020年の国連総会で首脳級会合を実施  
(下線は、COP10ではなかったプロセス)

詳しくは、にじゅうまるプロジェクト/国際会議レポート/COP14/ポスト2020プロセスの合意を参照。<http://bd20.jp/2018-11-29-1/>



# 付属書：ポスト2020生物多様性地球枠組みの準備プロセス

PREPARATORY PROCESS FOR THE POST-2020 GLOBAL BIODIVERSITY FRAMEWORK

(COP14/34)

- プロセスの基本原則：基本原則の確認
- 準備プロセスの構造：会議体や他の会合との関係
- 協議プロセス：重層的で、ボランティアなものも関係する協議プロセス
- 検討文書：ポスト2020の構造や範囲、SMARTな指標、多岐にわたる要素を検討
- 主要な情報源：国別報告書、生物多様性国家戦略、GBO5、IPBESのビジョン2050のシナリオ
- コミュニケーション・アウトリーチ：戦略（COP14別決定）の活用とハイレベルパネルの設置

# 多様な関係者って？

- 先住民地域共同体、国連機関、国連プログラム、他の多国間環境協定、準政府・地方自治体、政府間機関、NGO、女性グループ、ユース、ビジネスと金融コミュニティー、学術研究機関、宗教団体 (Faith based organization)、生物多様性に関係したり依存するセクターの代表、多くの市民、他のステークホルダー (COP14/34 パラ6)

# 検討プロセスで大事にする 諸原則も更新して採択 (COP14/34)

重要原則:

- 「参加participatory」
- 「包摂inclusive」
- 「包括comprehensive」
- 「変革transformative」
- 「触発(catalytic)」
- 「知識ベースknowledge base」
- 「透明性transparent」
- 「反復性iterative(何度も意見を往復。合意と当事者意識)」
- 「ジェンダー配慮Gender Responsive」
- 「視認性Visible」
- 「柔軟性Flexibility」      下線はCOPで新たに追加された原則



# ポスト2020の今

<https://www.cbd.int/conferences/post2020>

<https://www.cbd.int/conferences/post2020/wg2020-01/documents> などを元に作成

このうち、 CBD/WG2020/1/4 Future work programme of the Open-ended Working Group and allocation of tasks to other intersessional bodies and processes がプロセスについて最も詳しい(2019.7.19時点)

# 検討プロセス

- 2019.1 ディスカッションペーパー公表・アジア太平洋地域コンサルテーション会合 (RCM)皮切りに地域会合
- 2019.4 第3回コメント締め切り
- 2019.7 RCMの取りまとめ トロンハイム
- 2019.8 OEWG 1<sup>st</sup> (ナイロビ)
- 2019.11 SBSTTA/8(j) (モンリオール)
- 2020.2 OEWG 2<sup>nd</sup> (昆明)
- 2020.5 SBSTTA/SBI(モンリオール)
- 2020.6 IUCN-WCCマルセーユ
- 2020.7 OEWG 3rd (ボゴタ)
- 2020.11 COP15



今ここ&  
第3回コメント  
分析中

# 今はどのフェーズ？

- COP14から今まで — 愛知枠組みの課題や教訓＝活かすべき反省点、ポスト2020枠組みで大切な考え方、注意すべきこと、工夫、大事な原則、他の条約・SDGsとの関係、生物多様性条約の原則、目標の実現方法を意識した注意点、などをポスト2020の要素(Element)と呼んで、多様な関係者から意見を聴取。
- 総意に近い意見があるか、意見の幅の広さなどを把握したり、新しい意見・アイデアなどを探る段階

# 議論のためのKey Question

- どんな構成(目次)にすればいいと思う？
- 2050年ビジョン:人と自然の共生ってどう思う？
- ミッションはどうする？どんな考え方を入れるべき？
- 目標は？指標は？
- 国家戦略や報告の仕組みとどう連動するとよいと思う？
- 議定書との関係は？他の条約や国連目標との関係は？
- 資源動員や、資金メカニズムとの関係は？
- 主流化ってどう思う？
- ボランタリーコミットメントってどう思う？
- 巻き込むべき利害関係者は？
- コミュニケーションのあり方は？

# 議論のためのKey Question

- どんな構成(目次)にすればいいと思う？
- 2050年ビジョン: 人と自然の共生ってどう思う？
- ミッションはどうする？どんな考え方を入れるべき？
- 目標は？ 指標は？
- 国家戦略や報告の仕組みとどう連動するとよいと思う？
- 議定書との関係は？他の条約や国連目標との関係は？
- 資源動員や、資金メカニズムとの関係は？
- 主流化ってどう思う？
- ボランティアコミットメントってどう思う？
- 巻き込むべき利害関係者は？
- コミュニケーションのあり方は？



# 例えば、WWF

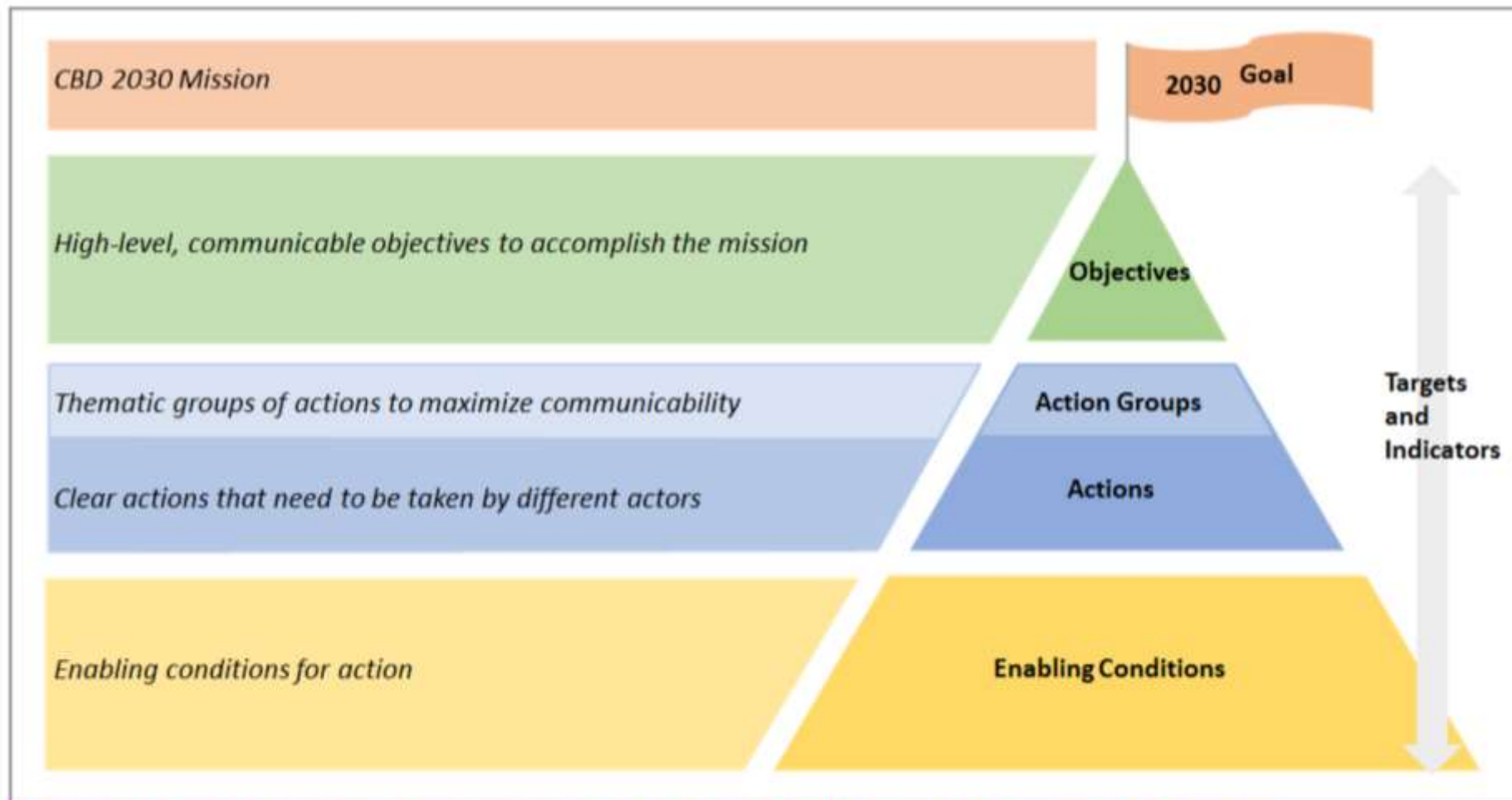


Figure 1. Proposed organizing framework for the post-2020 global biodiversity framework

# 例えばIUCN

- 「2050年ビジョンと持続可能な開発のために、種・生態系・遺伝的多様性の損失を止めるためのあらゆる必要で十分な行動を実施」(2030ミッション案)
- “科学に基づく目標設定 (science based target)” : 各目標について、科学的に集約可能な形での目標設定をすることで、国、地方自治体、企業等がコミットを決定し貢献しやすく、かつ、成果を監視しやすくなる

## ポスト2020目標に必要な要素 -日本からの提出意見(2018/12, 2019/4) - 具体的要素

日本は、ポスト2020目標においてさらに促進されるべき要素として、具体的に以下の4点を提案している。

- ✓ SATOYAMAイニシアティブの更なる展開
- ✓ 生態系を基盤とするアプローチ(EcoDRR、EbA)の推進
- ✓ 持続可能な生産・消費の促進
- ✓ 非意図的に侵入する侵略的外来種への国際的な対処

# OEWGが辿ると予想されるステップ

- 第1回OEWG(ナイロビ)ー【プロセス中心】

地域会合や他の会合の成果を集約。集約された意見を元にした意見交換。また、今後の進め方などを決める。

- 第2回OEWG(昆明)ー【要素の具体化】

第1回OEWG以降の会合(テーマ別、先住民地域共同体に関する作業部会、科学技術助言機関の成果)やコメントを集約。要素について具体的な文言も検討

- 第3回OEWG(ボゴタ)ー【ポスト2020の8割確定】

具体的な文言を協議し、(継続審議事項含め)COP15に、ポスト2020枠組みの文書案を提案する。

# パリ協定のような仕組みの導入検討

- 締約国、その他の国に対して、単独または共同で、自発ベースで、生物多様性条約、愛知ターゲットそして、ポスト2020枠組みに貢献する、生物多様性コミットメント(Biodiversity Commitment)の開発を考慮することを求める決定。(COP14/34 パラ11)
- 先住民地域共同体、あらゆる団体、利害関係者に対して、COP15の前に、ポスト2020枠組みに貢献し、かつ、Sharm El-Sheikh to Beijing Action Agenda for Nature and Peopleへの貢献として、生物多様性コミットメントの開発を考慮するようを求める決定。(COP14/34 パラ12)

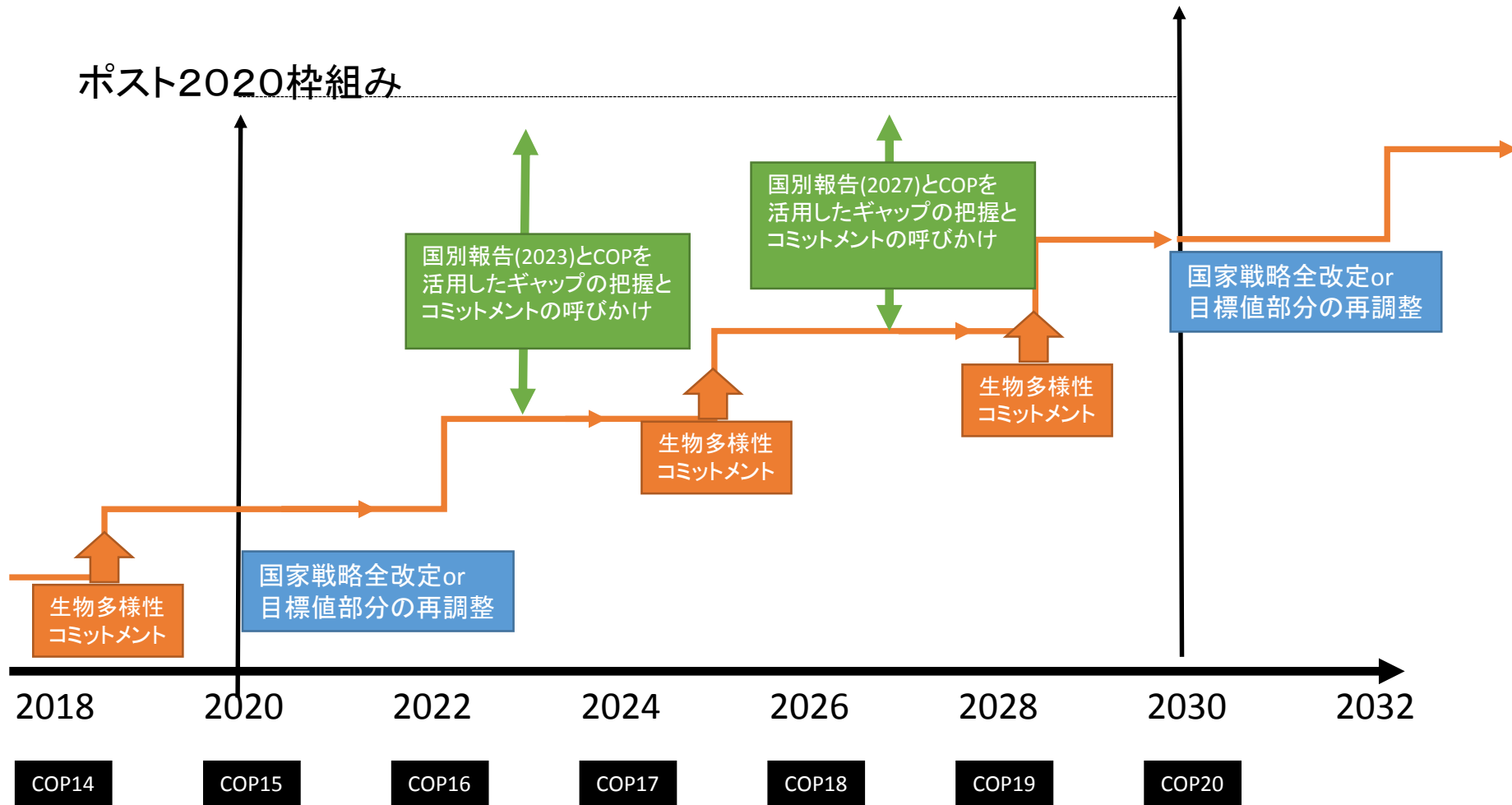
# 生物多様性コミットメント

- EUや欧州NGOの提案
- 愛知ターゲット。目標だけでは、達成できなかった。
- 実施のための仕組み・カバナンスの検討＋パリ協定の議論が組み合わさったのではないか。
- CommitmentとかContributionとか、National Determined Contribution-like Mechanism (NDCみたいな仕組み)など、言葉(定義)があいまい

# 国家戦略+コミットメント+国別報告書 (NBSAP+VC+NR) NGOのイメージ

人と自然の共生  
に向けた第3  
フェーズ  
(2030-2040)

ポスト2020枠組み



# 生物多様性コミットメント メリット

1. 世界目標と国別目標の累積の間に発生するギャップを埋める仕組み、
2. ポスト愛知へのオーナーシップ（当事者意識）、ポジティブな雰囲気づくり、CBDコミュニティー外からの注目、
3. ポスト2020枠組みへの好影響
4. 生物多様性条約と気候変動枠組み条約を橋渡しする仕組み、



# 生物多様性コミットメント 課題/不明点

- 各国の貢献についてある程度方向性をつけないと、バラバラの提案がなされて累積を計算できないのではないか？
- どのように各国の貢献を呼び起こすか？、野心的な目標を惹起するか？
- 誰がどのように受け入れ(あるいは、内容のチェックをするのか)、約束の履行(実施)状況を誰がどうフォローアップするのか？
- 国家戦略の違いは何か？
- COPの検討の場とどういう関係性をもたせるのか？